

建築業協会賞と公共建築賞の評価基準と方法 - 建築賞の審査講評にみる建築評価に関する研究 -

日大生産工（院） ○吉川 啓太
日大生産工 広田 直行

第1章 研究の背景と目的

建築は側面が多様にあり、一元的に評価することはできない。ヴィトルヴィウスは、建築に求められるものを、用・強・美の3項目と示している。また、細野透氏は“ひまわりチャート”として13項目の評価基準を示している。他にも今までに項目数・種類の異なる色々な評価基準が示されている。しかし、建築を評価するときの適切な項目数は明らかにされていない。また、抽象的な評価基準のほうが適しているのか、具体的な評価基準のほうが適しているのかも明らかにされていない。どちらが良いかは永久に言い切ることができないことかもしれないが、それぞれの問題点を明らかにすることはできる。問題点が明らかになれば、それを考慮して新たな評価基準・項目を検討することができる。

本研究は、建築賞を対象とし、評価基準・評価項目をつくる上での難しさや問題点を、実際の評価結果から明らかにしようとする試みである。

本稿では、その前段階として、あらかじめ規定されている評価基準（以下、規定評価基準）と実際の評価結果から得られる評価基準を分析し、評価基準に関する基礎データを求めることを目的とする。

第2章 研究の方法

本稿では、建築業協会賞と公共建築賞を調査対象とする。

まず、各賞の「募集要項」に書かれている規定評価基準（表1）と既往研究^{注1)}で求めた作業仮説基準^{注2)}を比較し、規定評価基準が網羅する範囲と規定評価基準の構成について分析する。

次に、各「選評」^{注3)}から作業仮説基準項目を

キーワードとして、これに一致、または類するものを実際の評価基準項目として抽出する。対象とする「選評」を表2に示す。そして、求めた実際の評価基準項目をもとに、規定評価基準との比較分析、賞同士の比較分析を行う。

表1 規定評価基準^{注4)}

賞名	評価基準
建築業協会賞	a.選考の基本方針 賞の選考は、建築の企画、計画・設計、施工、環境及び建築物の運用・維持管理等に関する総合評価に基づいて行うものとする。
	b.建築主、設計者及び施工者の協力関係 建築主、設計者及び施工者の相互の協力関係が良好であり、適正な価格により正常な施工が行われ、その結果、優良な建築物が建築されているものを選考に当たって重視するものとする。
	c.安全 選考に当たっては、安全に充分配慮して、企画、設計及び施工が行われていたかについて留意するものとする。
	以上のほか、選考に当たっては、次の事項を留意し、評価するものとする。
	d.事業企画 建築に係わる事業プログラムの健全性、社会的ニーズへの適合性
	e.計画・設計 構成及びデザインの斬新性、適切性、技術の先進性
	f.施工 施工技術・管理手法の斬新性、難条件の克服度
	g.環境 地域環境との調和、地球環境への配慮、建物周辺環境の整備
	h.維持管理 施設運用及び管理状況の適切さ、ユーザーの評価
	j.特別賞 特別賞は、環境への配慮、革新技術の適用、建物修復など伝統技術の継承、都市再開発の推進等に対する固有の課題への取り組みで特に優れている建築物を選考する。
公共建築賞	(i).建築として企画・設計・施工が優れていること
	(ii).地域社会への貢献が著しく、文化性が高いこと
	(iii).施設管理、保全が良好に行われていること

表2 調査対象^{注5)}

	文献名	年(回数)	作品数
建築業協会賞	建築業協会賞作品集	1988～2009年 (11回分)	142作品
公共建築賞	公共建築賞受賞作品集	2001・2003～2009年 (8回分)	161作品

第3章 規定評価基準の範囲と構成

作業仮説基準項目のうち、建築業協会賞と公共建築賞の規定評価基準に該当する項目を表3に示す。

The evaluation standard and method of BCS prize and public building prize
-A study about the evaluation standard and method of seeing to the examination comment of
architectural prizes-
Keita YOSHIKAWA, and Naoyuki HIROTA,

建築業協会賞は規定評価基準の a で、「V. 利用後」の段階以外の全段階から総合的に評価することを抽象的に示している。そして、具体的に b～h で特に重視する項目と留意する項目を示している。結果、建築業協会賞の規定評価基準は、作業仮説基準の「(27)物語性」以外、全ての項目を含んでいることが分かる。

公共建築賞は規定評価基準の (i) と (iii) で、「I. 企画」・「II. 設計」・「III. 施工」の段階と、「IV. 維持管理運営」段階の「(24)維持」・「(25)管理」の項目で評価することを抽象的に示している。それに加えて (ii) で、具体的に「(10)地域・地球環境への配慮」と「(21)その他」の一部の項目等々を評価することを示している。結果、規定評価基準は作業仮説基準のうちの 5 項目を含んでいないことが分かる。

以上の結果より、どちらの規定評価基準も、まず抽象的にどの段階で評価することを示し、それに加えて具体的に重視する項目を示すという評価基準の構成を採っていることが分かる。

第 4 章 実際の評価基準

4-1 建築業協会賞の実際の評価基準

「選評」から抽出した実際の評価基準項目数のうち、規定評価基準に該当する項目数の割合を示したものを図 1 に示す。

図 1 より、建築業協会賞の規定評価基準は実際の評価基準の項目数を 100% 網羅している。すなわち、仮説評価基準の範囲では、規定評価基準以外の項目では評価されていない。

しかし、図 2 より、全ての作品が全ての項目で評価されているのではなく、各評価項目を満たしている作品数に偏りがみられる。

また図 3 より、規定評価基準の中では、「a. 選考の基本方針」の項目が全ての作品で実際に評価されており、その他では「g. 環境」の項目が 9 割以上と、多くの作品で評価されている。少ない項目としては、「d. 事業企画」の項目が挙げられる。

図 4 より、作業仮説基準でみると、主に「(9)造形」・「(10)地域・地球環境への配慮」・「(16)機能性」・「(22)施工技術」の項目で多く評価され、全作品のうち、5 割以上の作品がこれらの項目で評価されている。

表 3 作業仮説基準における
規定評価基準の該当項目

段階	大項目	規定評価基準										
		建築業協会								公共		
		a	b	c	d	e	f	g	h	j	i	iii
作業仮説基準	I 企画	(1) 必要性	○		○						○	
		(2) 効率性	○								○	
		(3) 有効性	○								○	
		(4) 公平性	○								○	
		(5) 優先性	○								○	
		(6) 安全	○	○							○	
		(7) 設計者の関わり方	○								○	
	II 設計	(8) テーマ	○								○	
		(9) 造形	○			△					△	
		(10) 地域・地球環境への配慮	○					○		○	○	△
		(11) 室内環境への配慮	○							○	○	
		(12) オリジナリティ	○								○	
		(13) 完成度	○								○	
		(14) デザインプロセス	○								○	
		(15) 将来性	○								○	
		(16) 機能性	○								○	
		(17) 安全	○	○							○	
		(18) 時間への対応力	○								○	
		(19) 経済性	○								○	
		(20) 副表現	○								○	
		(21) その他	○								○	△
	III 施工	(22) 施工技術	○				△				○	
		(23) 施工管理	○	△			△				○	
	IV 維持管理運営	(24) 維持	○							○		○
		(25) 管理	○							○		○
		(26) 運営	○						△			
	V 利用後	(27) 物語性(話題性)										
		(28) 愛着度								○		○
		(29) 感動								○		
		(30) 満足度								○		
	VI 全体	(31) プロセス		○								

○	一致
△	一部一致

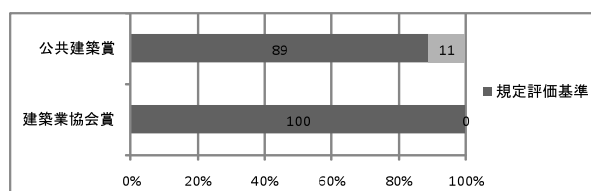


図 1 規定評価基準該当項目数の割合

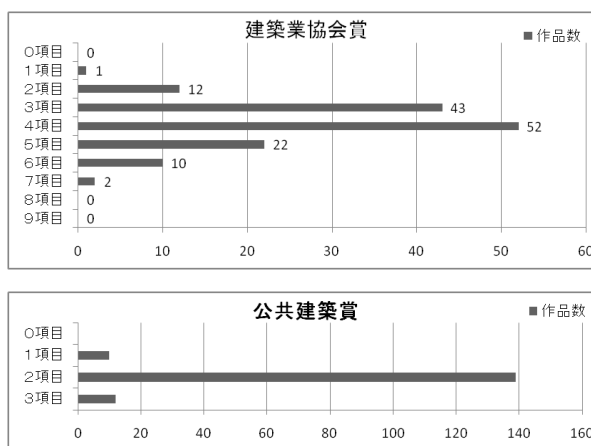


図 2 規定評価基準を満たしている項目数

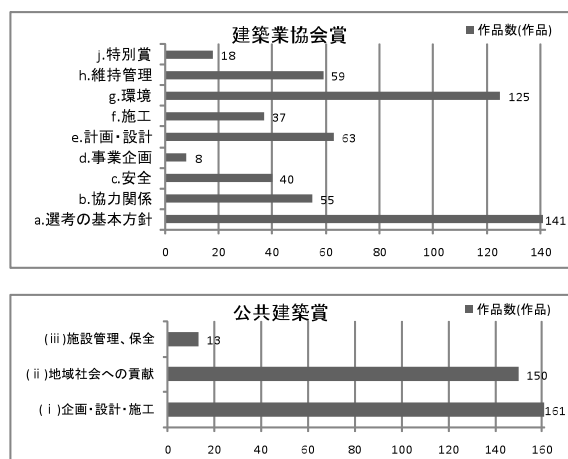


図3 規定評価基準項目で評価された作品数

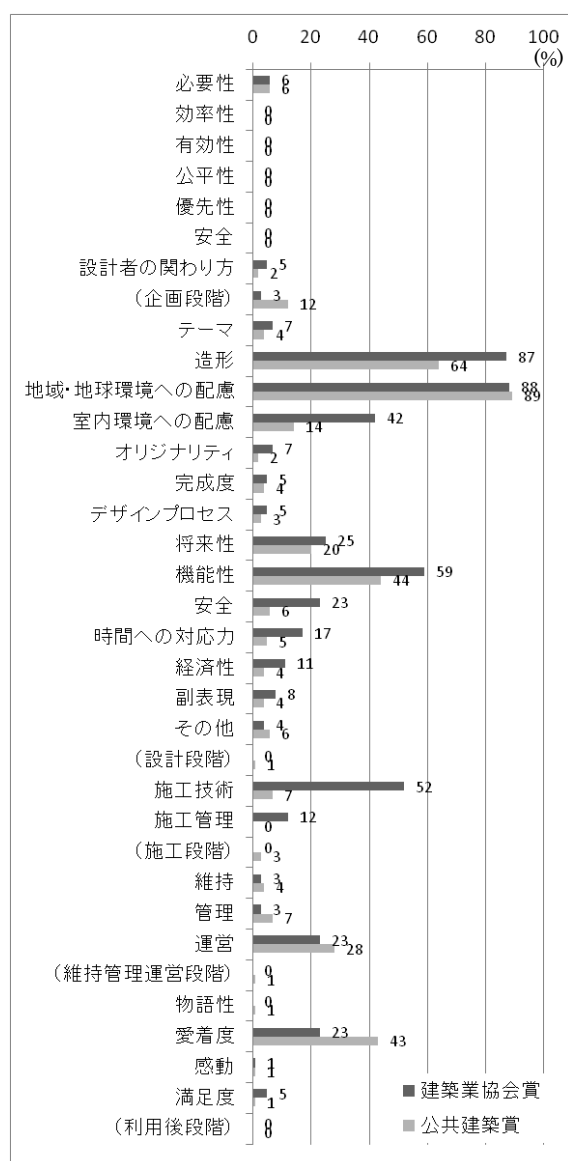


図4 作業仮説基準で評価された作品数の割合^{注6)}

4-2 公共建築賞の実際的评价基準

図1より、公共建築賞の規定評価基準は実際の評価基準項目数の約9割を網羅しているが、規定評価基準以外の評価項目でも評価されている。図4より、規定評価基準以外の項目は、表4で規定評価基準の範囲外であった5項目で、実際は特に、「(26)運営」・「(31)プロセス」の項目で多く評価されている。

図3より、規定評価基準の3項目中、「(i)企画・設計・施工…」と「(ii)社会貢献…」の2項目は9割以上の作品で評価されている。しかし、図2より、「(iii)維持管理」の項目で評価されている作品が約1割と少ないため、全ての項目で評価されている作品は約1割となっている。公共建築賞にも規定評価基準の各評価項目を満たしている作品数に偏りがみられる。また図3より、「(i)企画・設計・施工」の項目は全ての作品で評価されているが、約8割を「設計」が占め、「企画」・「施工」は約1割と少ない。

図4より、作業仮説基準でみると、主に「(10)地域・地球環境への配慮」・「(9)造形」・「(16)機能性」・「(28)愛着度」の項目で多く評価され、全作品の内、4割以上の作品がこれらの項目で評価されている。

4-3 共通点と相違点

図1より、建築業協会賞の規定評価基準は公共建築賞より実際の評価基準を網羅している。

図2より、どちらの賞も規定評価基準の全ての項目を満たしている作品は少なく、各評価項目を満たしている作品数に偏りがみられる。

図4より、作業仮説基準31項目中で両賞とも1作品以上で評価されている項目はその内の25項目である。すなわち、作業仮説基準のうち、これらの評価項目は両賞の実際的评价で使われているといえる。

特に差がみられる項目としては、「(9)造形」・「(11)室内環境への配慮」・「(22)施工技術」・「(28)愛着度」の4項目が挙げられ、2割以上差がある。

また両賞ともに共通して多く評価されている項目は、「(9)造形」・「(10)地域・地球環境への配慮」・「(16)機能性」の項目で、4割以上の作品がこれらの項目で評価されている。しかし、この大項目3項目の内訳(図5)をみると、中

項目の割合には違いがみられる。「(9)造形」では、「技術」の項目に特に差がみられ建築業協会賞のほうが高い。「(10)地域・地球環境への配慮」では、「社会性からみた地球環境への配慮」の項目で特に差がみられ、公共建築賞のほうが高い。また「(16)機能性」の項目では「交流」の項目で特に差がみられ、公共建築賞のほうが高い。これらの中項目は各賞の規定評価基準で示されていた項目を含んでいる項目であり、実際の評価でもこれらが反映されていると考えられる。

第5章 まとめ

本稿から、評価基準・評価項目をつくる上での難しさや問題点を、実際の評価結果から明らかにするための基礎データとして、主に以下のことが確認できた。

- ・両賞の規定評価基準とも、作業仮説基準の9割以上の評価項目を網羅し、幅広い評価基準を採っている。
- ・両賞とも、抽象的な評価項目で評価する大枠を示し、それに加えて具体的に重視する項目を示すという評価基準の構成を採っている。
- ・規定評価基準の全ての評価項目を満たしている作品は少なく、評価項目によって作品数に偏りがみられる。
- ・両賞の実際の評価で、作業仮説基準 31 項目中 25 項目の評価項目が使用されている。
- ・両賞ともに、「(9)造形」・「(10)地域・地球環境への配慮」・「(16)機能性」の3項目で特に多く評価されている。しかし、各項目の内訳は異なり、各賞の重視する項目により、中項目の割合に差がみられる。

今後の課題としては、本稿で求めた基礎データと、既往研究で同様に求めた作品選奨の基礎データを比較し、建築賞3賞の基礎資料としてまとめることが必要である。

[参考文献]

- 1) 森田憲一訳註：「ウィトルウィウス建築書」，東海大学出版会，2004年9月
- 2) 日経アーキテクチュア編：「建築批評講座 - チャートで読む作品の価値 -」，日経BP社，1996年10月
- 3) 有馬明恵著：「内容分析の方法」，ナカニシヤ出版，2007年7月

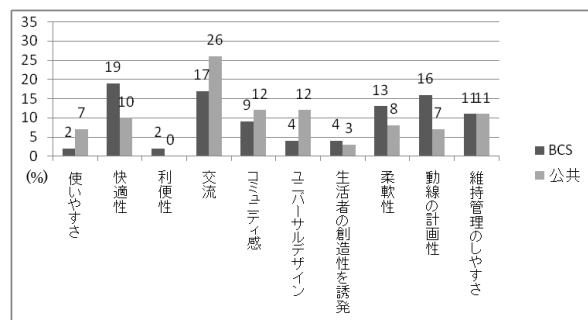


図5 「(9)造形」の内訳

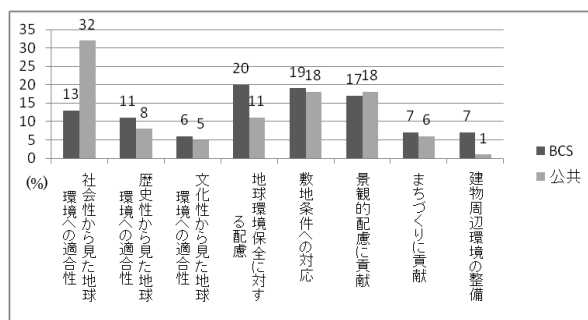


図6 「(10)地域・地球環境への配慮」の内訳

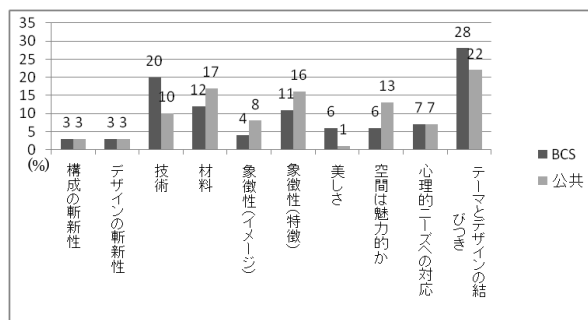


図7 「(16)機能性」の内訳

[注釈]

- 1) 吉川啓太，広田直行：日本建築学会作品選奨の審査講評にみる評価の実態-建築作品の評価基準と方法に関する研究-，第42回日本大学生産工学部建築部会講演概要，pp193-196，2009年12月
- 2) 1)で作成した，11の建築評価の評価基準を参考に31項目大項目とそれらを構成する中・小項目で構成された，評価基準の仮説
- 3) 各作品の受賞理由が書かれている文章
- 4) 建築業協会賞の評価基準は文章形式で示されているため，本研究では表1のように文章を分け，それぞれを一つの評価基準として取り扱う。
- 5) 「選評」の書かれていない受賞作品は除いている
- 6) 図4の大項目に含まれている「(企画段階)」・「(設計段階)」等は，各段階を抽象的に評価したときにカウントされる項目